

1958
作品ナンバー0020

海ッ子 山ッ子

劇
35ミリ
白黒／70分
日・英語版

- 企画
静岡県婦人団体連絡会
- 協賛
中外製薬株式会社

スタッフ

- 製作
村山英治
- 原作・脚本
筒井敬介（NHK連続放送劇『でんでん虫の歌』より）
- 演出
木村莊十二
- 撮影
木塚誠一
- 音楽
林 光

- 出演
ゴリラ君（6年生）：
吉田春夫
京助（5年生）：
高田恭朗
早見先生：吉沢久嘉
青葉丸：松本克平
柏木（神主）：
小笠原章二郎
校長：御橋 公
龍宮館の婆さん：
飯田蝶子
バスガールのなみ子：
有田紀子
他

1959年ベネチア国際映画祭サンジオルジュ賞
文部省選定
日本PTA全国協議会特選
東京都教育委員会選定
〔推薦〕青少年映画審議会
中央児童福祉審議会
全国地域婦人団体連絡協議会
日本青年団協議会
都下学生映画愛好連合
東京都教職員組合
東京映画愛好連合
日活配給 ドイツ、オーストリアTV放送

この作品はベネチア国際映画祭でサンジオルジュ賞を得た。この賞は、全島が教会であるサンジオルジュ島にあるカトリックの教団が人道主義を鼓吹する映画に与える賞で、日本では1956年に日活の『ピルマの豎琴』が同じ賞を得ており、2度目の受賞であった。





山も海もある伊豆半島沖浦町、そこへ若い小学校教師、早見が赴任してきた。早見を待ち構えていたのは、犬猿の仲の浜辺の村と背後のミカン山の村。漁民と農民は生活も気質も異なって、先祖代々反目が続いていた。子供たちも、磯っ子、山っ子といわれている。

早見は磯野でバスから降ろされ、無理に龍宮館に下宿させられ、網元の青葉丸の案内で岬の神社でお祓いをうけることになった。お祓いの真最中に拝殿の奥から京助という山っ子が鳩をもって飛び出してきて大騒ぎになった。早見はいきりたつ青葉丸をなだめて、山っ子の少年の鳩小屋を見に行くことにする。その時ひそかにあとをつけてきたのは〈ゴリラ〉をガキ大将とする磯っ子たちだ。ミカン山で京助とゴリラの取っ組み合いが始まり、止めにかかった早見は着任早々さんざんな目にあってしまう。

ミカン山は摘果の季節だ。京助の父の田川は、摘果の仕事を磯っ子にも、と校長に申し出、校長はこれを歓迎した。お互いの仕事を知り合うことで磯っ子と山っ子が仲良くなれればと思ったからだ。だが結果は……。

ある日、京助の父は、うかつにも京助のメス鳩を逃がしてしまう。卵を抱きはじめてた鳩なのだ。京助は夜道を神社に探しに行く。祭りの前夜で笛の練習をしていたゴリラが愛犬のテツと一緒についてくる。鳩は神社の裏の荒磯に突き出た松の枝にとまっていた。山っ子の京助は木登りは得意だったが鳩をつかまえた瞬間、重心を失って暗い海へ落ちてしまった。慌てたゴリラは、急いで小舟をだして京助を引き上げるが、櫓が流れて2人は沖へ漂流をはじめ、夜明けごろに小さな無人島に漂着する。

村では大人たちが大騒ぎ。やがてその争いが頂点に達した時、ゴリラからの手紙を首にゆわえたテツが海を泳ぎ渡ってきて、2人の無事を知らせた。

2人を乗せた船が港につくと、ゴリラの父の青葉丸と京助の父の田川は、固い握手をした。子供たちの友情で、海辺の磯野と山の大畑の多年にわたる大人たちの確執も消えていった。